

【令和6年度版】教育DX推進（「徳島ICT活用モデル」の活用）に係る FAQ

① ICTの活用推進

1 Q:「徳島 ICT 活用モデル」の S 段階から A 段階へのステップアップのポイントは？

A:「管理職のリーダーシップ」「できることから どんどん進める」「みんなで取り組む（校内研修・ミニ研修・普段の会話 等で横展開）」がポイントです。教師、児童生徒が積極的に利用することで、「デジタルならではの効果的な使い方」のイメージが膨らむことが期待できます。

2 Q:タブレットは活用しているが、発表（伝える）だけで終わってしまい、友達の意見と比較したり考えを深めたりすることが少ない。

A:クラウドを活用すると、口頭での発表時間を短縮したり、発表と同時に児童生徒の意見や考えを可視化・共有したりすることが可能です。そうして捻出した時間で、比較・分類・整理する活動を中心に授業を展開したり、児童生徒同士が質問し合い、協議する活動を行ったりしている例もあります。

3 Q:研究授業や公開授業などで M 段階の授業を参観した経験が少なく、児童生徒主体の活動をイメージしづらい。

A:「[StuDX Style \(文科省\)](#)」や「[徳島 ICT 活用モデル](#)」、「[すだちくん I 分 StuDX](#)」には、児童生徒主体の活動をイメージできるコンテンツや事例が掲載されています。参考にしてください。

4 Q:各学年・各学級によって、ICT の活用等に差異がある。

A:各小学校で毎年度策定している「情報活用能力年間指導計画」を、必要に応じて随時、実態に即した内容へ改訂をお願いします。なお、本県では「[ICT スキル習得体系表](#)」で、小学校（低・中・高）から高等学校まで目指す姿を段階的に示しているので参考にしてください。また、①-1に示したポイントも参考にしてください。

5 Q:教育 DX 推進に対する教員の意識の差があり、ICT の活用が進んでいない。

A:①-1のポイントで具体的な取組を進めるとともに、「令和の日本型学校教育の構築」や「Society5.0 時代にふさわしい学校の実現」のためには、DX による授業改善や校務の効率化が必要であることと、全校種の学習指導要領で「情報活用能力」が学習の基盤として育むべき資質・能力と位置付けられていることの共通理解をお願いします。

6 Q:校務支援システムは活用しているが、それ以外の校務での ICT 活用ができていない。

A:先生方自身が ICT の利便性を感じる事が重要です。校務の効率化の好事例としては、家庭等への連絡やお便り等のデジタル化・クラウド化、ICT を活用した出欠連絡、アンケート・集計作業等のデジタル化、生成 AI を活用した文書の草稿作成・画像の生成などが、よく紹介されています。

※「[GIGAスクール構想の下での校務DXチェックリスト](#)」を参考にしてください。

7 Q:生成 AI の活用ができていない。

A:まずは、先生方の校務にて活用してみてはいかがでしょうか。教材作成や自分が作成した文書のチェック、アンケート結果の分析などを試してみてください。（今年度の[徳島県 GIGA スクール構想推進本部 小・中・高の部会通信](#)も参考にしてください。）

8 **Q:**タブレットの持ち帰り・タブレットを用いた家庭学習を保護者に理解していただくためには、どのような取組が必要か？

A:まずは、保護者の皆様にも、デジタル学習基盤の活用を前提とした新しい学習形態が必要であることを御理解いただく必要があります。その方策として、学校だよりや学級通信で適宜お伝えするほか、授業参観や家庭学習で従来とは異なる学習方法を実際に見ていただく事例があります。

また、家庭でのタブレット利用について、保護者に一任するのではなく、各自治体や学校が示すガイドラインを共通理解していただくことも必要です。文部科学省からは、「1. 児童生徒が端末を扱う際のルール」「2. 健康面への配慮」「3. 端末・インターネットの特性と個人情報の扱い方」「4. トラブルが起きた場合の連絡や問合せ方法等の情報共有」の4点が、保護者と共有しておくべき主なポイントとして示されています。

② ICTの効果的活用

1 **Q:**各授業・各教科での効果的な使い方に課題がある。(効果的な活用事例が知りたい。)

A:「[StuDX Style \(文科省\)](#)」や「[徳島 ICT 活用モデル](#)」、「[徳島県 GIGA スクールサポートサイト](#)」を御覧ください。なお、これらの事例は「きっかけ」や「参考」に過ぎないので、各学校における児童生徒の実態等に応じて、効果的な活用方法の研究をお願いします。

2 **Q:**学習アプリや Web コンテンツの活用方法について(使い方が分からない・活用方法が分からない)

A:お一人で悩まず、校内研修等で課題等を共有してみてください。なお、徳島県立総合教育センターの「[GIGA スクールサポートサイト](#)」や、民間企業等が実施しているセミナーを活用することができます。

3 **Q:**小学校低学年での効果的なタブレットの活用方法が分からない。(あまり使わせていない。)

A:教師が「効果的に活用させる」方法を考えるのではなく、①まず使わせる。②効果的な活用方法を児童自らに気付かせる(見つけさせる・感じさせる)。という方策の検討はいかがでしょうか。もちろん、「こわさないように、ていねいにあつかう。」「ともだちを、いやなきもちにさせない。」「どうしたらいいのか まよったら、おとなにそうだんして、じぶんかってなことをしない。」等のモラル・セキュリティ教育を十分に行った上での「まず使わせる。」ですが、学年を問わず、「カメラ機能」「アンケート機能」「共有機能」等を活用することで、学習に効果的な使い方ができている事例があります。「低学年はローマ字を未学習なので・・・」という声を聞くこともありますが、低学年から英字やキーボードの配列に慣れることも大切であるとも言われています。(3年生で一気に詰め込む方が、教師も児童も負担が大きいからです。)

また、中学年以降の「情報活用能力」育成のステップアップのためにも、低学年におけるタブレットの活用は重要です。

4 **Q:**考えや意見を発表する場面での効果的な活用がイメージできない。(デジタル上に書き込んでも、その後の発表の仕方が従来どおりで、紙のノートに書いた後の発表と変わりがない。)

A:①-2を参考にしてください。また、「共有機能」を上手く活用することで、これまで一部の児童生徒による発言・発表で進めていた授業から、より多くの意見・学級全体の意見をもとにした展開に変容することが可能です。また、教室外とリアルタイムでつないだり、過去の発表データを用いたりすることで、空間と時間を越え、より多面的・多角的に捉えることも可能です。

5 Q:ICT 活用が学習に効果があるか分からない・実感できない。

A:ICT を活用したから学習に効果が出るわけではありません。ただ、これからの児童生徒が触れる社会は、間違いなく ICT 活用及び情報活用能力が当たり前に要求されるでしょう。なお、ICT 機器活用の学習効果については、令和6年度全国学力・学習状況調査の結果をもとに、文部科学省・国立教育政策研究所が分析した資料等にも示されているとおりです。「ICT 機器を使う時間・機会の単なる増加」ではなく「ICT 活用による”授業改善”の増加」が、学力向上につながります。

6 Q:授業でタブレットは使っているが、タブレットを使うことが目的となっている。

A:デジタル学習基盤の活用を前提とした授業づくりが求められていますが、授業の目的はこれまでと同様、各教科等で示す資質・能力の育成です。タブレット等を教師は「教具」として、児童生徒は「文房具」として活用することで、よりよい資質・能力の育成を図ることができます。タブレット等を効果的に活用している学校では、多様な子供たちを包摂する実践が進むとともに、多様な教材の活用や思考過程の可視化などにより、個別最適な学びと協働的な学びが促進され、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が進んでいると言われています。

7 Q:複式学級における効果的な ICT 活用方法が分からない。

A:まず、他校や有識者、専門家等と接続したオンライン学習への活用が考えられます。その他、学級内だけであれば、①本時の課題・大切なポイントなど「学習の手引」となるシートを用意 ②自分のペースで学習を進めることができるようにする ③個々の児童生徒の学習過程や考えを可視化-リアルタイムに進捗状況等を把握 という活用方法が考えられます。そうすれば、教師が児童生徒に直接、説明・指示等を行う時間を短縮し、本当に指導や助言が必要な場面でアプローチできる機会を増やすことができるでしょう。（複式学級でなくとも、効果的な方法です。）

8 Q:特別支援学級における効果的な ICT 活用方法が分からない。〇〇に障がいがある児童生徒への、ICT の活用方法が分からない。

A:ICT 活用の効果として、一人一人のよさを伸ばし、困難の克服を助ける大きな可能性があると言われています。合理的配慮の観点から、弱視、難聴、知的障がい、肢体不自由、病弱・身体虚弱、言語障がい、自閉症・情緒障がいなど、一人一人の状態に応じた活用をお考えください。（特別支援学級・特別支援学校でなくとも、大事にしたい観点です。）特別支援教育における ICT 活用のポイント・事例なども、②-1で紹介のホームページ等に掲載されています。

③ 教育データの利活用

1 Q:振り返りやポートフォリオのデジタル化のメリットとは？

A:振り返りやポートフォリオをデジタル化することにより、自分が学習してきた内容の記録（スタディログ）の蓄積が容易になり、児童生徒は自分の学びの客観的な把握（メタ認知）による問題解決能力の向上、教師は（児童生徒の学習履歴等を共有することで）個々の学習状況の把握・評価等が可能になり、的確な指導の精度向上をしやすくなることが期待されます。また、他者との協働的な学習を実施する際にも役立てることができ、児童生徒が自らの考えを広げたり深めたりする機会にもなります。

2 Q:ICT 機器を活用して、教師-教師、教師-児童生徒、児童生徒-児童生徒でデータやノート、成果物などの共有ができていない。

A:まずは、「なぜ共有するのか?」「何を共有するのか?」ということを共通理解することが重要です。そうすれば、それぞれのデータを共有するにあたって、どのクラウドサービスを利用するのか、データを整理・仕分けする方法はどう徹底するのかなど、次のステップに進むことができます。

3	Q:ICT 機器等の準備やデジタル化したデータ（ノートや板書等）を残すことに、時間や手間がかかる。 A:全てのことを教師一人が行うことは大変です。そこで、児童生徒に任せられることはないでしょうか。例えば、当番活動やボランティアで児童生徒が ICT 機器の準備や学習記録の保存の手伝いをしているという例もあります。なお、今までの授業スタイルをそのままデジタル化する（板書をスライドにする等）ことは非常に手間がかかる上に、あまり効果がないと言われています。授業スタイルを含めた改善を考えてみてください。
4	Q:小規模校のため、協働的な学びの場面を設定することが難しい。（学級に一人という場合もある。） A:児童生徒の人数が少ない学級こそ、多様な意見や考えに触れ、学びを孤立させないための手立てが必要です。他校の児童生徒や地域の方とつながって学習する機会を増やしたり、各校で蓄積されているデジタルデータ（上級生の当時の意見や考えなど）を活用したりする事例もあります。先生と一緒に協働的な学習をすることが有効な場合もあるでしょう。
5	Q:Google アカウントや Microsoft アカウントがあれば、スタディログを残すなど、もっと活用できると思う。小学校から高等学校段階まで、継続して特定のアプリ等を使用できないのか。 A:県立学校には、Microsoft アカウントや Google アカウントを整備しています。市町村立学校にも、県域で利用できるアカウント（Google アカウント）の配備の準備を進めております。

④ 情報活用能力の育成

1	Q:タイピングスキルが不十分なため、操作に時間がかかり、学習の進行が遅れる。文字入力において、キーボードを使っていない。 A:タイピングスキルは、短時間で身に付くものではありませんが、基礎的・基本的かつ絶対的に必要な技能です。したがって、授業中だけではなく、隙間時間や休み時間、家庭学習などにおいても、できるだけ早い段階で、多くのタイピング練習の機会を設けていただきますようお願いします。 ※ 文部科学省が示すキーボードにおける日本語入力スキル（令和8年度までのKPI）：小学校 40字／分 中学校 60字／分
2	Q:授業時間内に、ICT を使用する時間を設定することが難しい。 A:初期の段階では一つ一つのことに時間や手間もかかりますが、「情報活用能力」の向上につれ、より効果的・効率的な授業が可能となります。また、全体（一斉）学習した方がよいもの、個別学習でも可能なもの、隙間時間でもできるものなど、授業や家庭学習等で取り扱う内容を見直すことも大切です。将来的には、先生が ICT を使用する時間を設定するのではなく、児童生徒が ICT を活用するか・しないかを、自分で判断することが当たり前になるかもしれません。
3	Q:読み書き・計算など、基礎的・基本的な力を身に付けることが優先になっている。 A:「情報活用能力」も学習の基盤となる資質・能力に位置付けられたため、読み書き・計算と同様に身に付けさせる必要があります。
4	Q:タブレットの持ち帰りがあまりできていない。 A:学習の基盤となる「情報活用能力」の育成には、授業だけではなく、家庭学習での端末利用も重要です。授業での学習と家庭学習とのシームレス化にも効果的で、端末が日常的に利用される“文具”となるためには、持ち帰りが当たり前でなければなりません。なお、コロナ禍や大規模災害のような有事に、オンライン学習を当たり前の様に実施できるように備えるためにも、平時から家庭で端末を使う習慣を付けておく必要があります。

5	Q:家庭の Wi-Fi 等の関係で持ち帰りが行えない。 A:個別対応が必要な事例であると考えられますが、オフライン（インターネットに接続できない状況）でも、学校で事前に課題をダウンロードしておいたり、ファイル編集等ができる状態にしておいたりすることで、家庭に持ち帰ってできる学習があります。（モバイルルータの機器等を貸し出している自治体や学校もあります。）
6	Q:児童生徒の情報モラルについて、心配している。 A:情報モラル教育・情報セキュリティ教育は非常に重要です。ICT を活用するからこそ、様々な問題が具現化しますが、教職員対象の情報モラル教育研修会や、県の情報モラル教育サポートサイト等を活用して、児童生徒に ICT との付き合い方を考えさせてください。児童生徒は日常生活の中で必ず ICT を使用しています。そのためにも情報モラル教育を、全校体制で（全ての教職員が）実施できるようお願いします。なお、今年度、県教委が作成した情報モラルコンテンツ（GIGA ワークブックとくしま）も御活用ください。

⑤ 個別最適な学び

1	Q:個別最適な学びの創出に課題がある。 A:個別最適な学びの創出には、教師・児童生徒の ICT スキルだけでなく、児童生徒自身が学習を主体的に進める授業への変革が必要です。そのためには、段階的に教師が教科の特性に応じた「学び方」を教え、少しずつ学習者中心の授業へと移行する必要があると言われています。よく使われるイメージは、「先生が教える授業から、児童生徒が学び取る授業への変革」です。
2	Q:「指導の個別化」「学習の個性化」を見据えた“複線型の授業づくり”に課題がある。 A:「複線型授業」とは、学習者一人一人がそれぞれのペースやタイミングで学習を進める、学習者主体の授業形態を指します。一方、従来から行われてきた、教師主導の一斉授業による授業形態を「単線型授業」と呼びます。これらは授業における“場面”を表現する用語であり、実際の授業では“単線型”と“複線型”が混在することが多くなります。学習者主体の授業形態だけの成立を目指しているのではないと思いますが、児童生徒の学びのスキルに応じた自己調整学習をとおして、少しずつ“複線型”の授業場面も取り入れてみてください。 ※“単線型”と“複線型”のどちらかに優劣があるわけではないと言われています。
3	Q:「一斉授業で先生が教える」という授業観がなかなか変わらない。 A:知識伝達に偏った一斉授業のみの学習では、児童生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を育むことが難しいと言われています。また、教室内の多様な学びのニーズ（特異な才能、学習のつまずき〔低学力が要因のものを含む〕、発達障がい、不登校等）に対応するためには、一斉授業に加え、個別最適化された学習指導を積極的に推進していくことが求められます。一斉授業による知識の基礎的な習得を大切にしつつ、多様な学習形態を組み合わせることで児童生徒一人一人の学びをより深め、「主体的に学習に取り組む態度」の育成を促進していく必要があります。
4	Q:多様な児童生徒に対応するため、教材などを準備・工夫することは、教師の負担が大きい。 A:これまでの授業でも、先生方は一律的に知識の伝達を行うのではなく、学習内容を十分理解している児童生徒、遅れがちな児童生徒、配慮が必要な児童生徒など、個に応じた学習の準備や工夫はされてきました。ICT を活用することで、教材や学習コンテンツをより効率的・効果的に準備・活用できると考えられています。すべての授業を急に変えることは教員にとっても児童生徒にとっても負担が大きくなるので、まずは児童生徒が学習リソースを少しでも選択できる授業づくりなど、できそうなところから取り組んでみてはいかがでしょうか。

5 Q:教員の授業観の転換を図ることに課題がある。

A:デジタル化・多様化・人口減少等、社会が劇的に変化している今、求められている学校教育や子供たちが身に付けるべき資質・能力が変わりました。「教師に ICT が必要であるかどうか」ではなく、「これからの児童生徒が ICT を必要としている」と考えることが重要なかもしれません。管理職のリーダーシップのもと、研修等を進めていただきますようお願いします。

6 Q:高等学校(専門高校)においても、「個別最適な学び」を授業で行う必要があるのか。

A:社会が劇的に変化し続ける時代、またマルチステージの人生を生きる生徒たちにとって、メタ認知やリスキングなど、自ら「学び続ける力」が重要であると言われています。しかし、ある民間の調査では、「学年が上がるほど、上手な勉強の仕方が分からないと答える児童生徒が増加する。」という回答結果が報告されており、そのことが文部科学省でも取り上げられています。このようなことも踏まえ、普段の授業から、生徒が自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促す「個別最適な学び」の学習スタイルも必要であると考えられています。

⑥ デジタル人材の育成

1 Q:教師の ICT に関するスキル差が大きい・教師の ICT に関するスキル不足の問題がある。教師側が知識不足・経験不足のため、ICT 活用が負担になっている。

A:誰しも得手・不得手があるのは当然です。しかし、「情報活用能力」を学習の一基盤として児童生徒に学習させるからには、教師も「情報活用能力」を身に付けなければなりません。先生自身が「できることから取り組む」「取り組みながら考え続ける」姿勢そのものが、児童生徒の学びに対するロールモデルになることを期待し、全校体制で積極的な取組をお願いします。

2 Q:授業の仕方について、従来どおりの学習形態でよい (ICT は使わなくてもよい) と考えている教師もいる。

A:まずは、⑤-4 のとおり、授業観の転換が重要です。また、従来通りの学習形態 (アナログのみ) では、学習指導要領が示す学習の基盤となる資質・能力の1つである「情報活用能力」が育成される授業になっていません。「学習の基盤となる資質・能力の育成は、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ること」と示されているため、本人による授業の見直しはもちろんのこと、管理職を含めた全校体制での取組が重要です。

3 Q:ICT 活用・教育 DX 推進ができる人材の育成やロールモデルになる人材の育成に課題がある。

A:ICT 活用の中核となる人材も重要ですが、限られた先生だけに任せるのではなく、全ての教職員がチームとして推進することも非常に大切です。先生方一人一人の授業スタイルが違いうように、ICT 活用方法にも先生方の個性を生かし、「ICT 活用教育に取り組む姿勢」だけはしっかりと共有していただきたく思います。

⑦ 機器・ネットワーク等の環境

1 Q:セキュリティの設定が厳しく、GIGA 端末を使いづらい。

A:公的な機関として、個人情報保護法の遵守等、情報の取扱いについて適正に管理する必要があります。自治体ごとのセキュリティポリシーもありますので、必要に応じて所属の教育委員会へ御相談ください。

2	Q: 誰か一人でも児童生徒の端末等に不具合や故障があると、授業で利用しづらい。 A: 予備機を活用することも有効です。授業支援アプリ等はクラウドを利用しているものが多く、個人のIDやパスワード等があれば、他の端末でも利用可能なものが多いですから、端末が変わってもすぐに活用できる環境にしておく準備等も必要です。
3	Q: ネットワーク（遅延等）の問題について A: 同時アクセス数を制限するために、同時使用する学級数を調整している事例もあります。各校それぞれの状況に応じて、所属の教育委員会へ御相談ください。
4	Q: 校内等で GIGA 端末が Wi-Fi につながらない場所がある。 A: 環境面に関する事項は、敷設工事やネットワークアセスメント等が必要な場合もありますので、所属の教育委員会へ御相談ください。
5	Q: クラウドを利用するためのアカウント整備が整っていない。共同編集が可能なアプリケーションなど、GIGA スクール構想の実現に対応した教育環境が整っていない。 A: クラウド利用については、所属の教育委員会へ御相談ください。なお、クラウドが利用できれば、各OSの標準アプリで共同編集は可能です。
6	Q: 自治体による OS・アプリ・アカウント管理の方法等の差が、ICT 活用や DX 推進を難しくしている。 A: 具体的な要望につきましては、所属の教育委員会へ御相談ください。なお、文部科学省が実施しております「リーディングDXスクール事業」では、GIGA端末の標準仕様に含まれる汎用的なアプリやクラウド環境を活用した事例の創出に取り組まれていますので、ホームページや公開学習会等も御活用ください。

⑧ その他

1	Q: タブレットを使用することによる、視力低下等の健康面が心配。 A: 文部科学省の「子供の目の健康を守るための啓発資料」等を御活用ください。（学校で適正な端末使用方法を学ぶことで、家庭での端末使用方法の改善・目の健康を守る態度の育成にもなります。）
2	Q: タブレットを利用して資料等を共有する際に、著作権を侵害していないか心配である。 A: 「令和 5 年度改訂版 学校における教育活動と著作権（文化庁）」などを参考に御確認ください。なお、よくわからないから使わない、使わせないということのないように、適切な対応をお願いします。

※ この FAQ は、令和6年度学校訪問及び学校訪問未実施校へのWebヒアリングにて、実際にいただいた御意見等に対する回答です。